

【水と人の心】

光英VERITAS中学校 一年 守屋 佳乃

ある日の昼下がりのことだった。その日は気持ちの良い風が吹き、私を照らす日差しがとても心地よかった。

学校が苦手で、辛くて長期に亘って家で休んでいた私に、母は家の近所にある大堀川への散歩を勧めた。私の体力を落とさせないためなのか。外に行って気分を晴れさせようと思ったのか。母の心の内がわからないまま、重い足を上げて渋々大堀川へと向かった。

川沿いを歩いているとランニングしてる人や小さな公園ではしゃいでいる子供達。中には川を眺めるお婆さんもいた。活気あふれるその光景に少し当てられ、道端をとぼとぼ歩いていると、何か流れるような、美しい音が耳いっぱいに溢れた。私は横に目を向けた。目に映ったのはゆっくりと光に当てられながら流れていく水。あまりに綺麗なそれは、私のこころを穏やかにした。後ろから聞こえてくる楽しそうな笑い声に、目の前に広がる綺麗な川。気づけばその綺麗な光景と、水と人との音のハーモニーに惚れ込んでいた。

しかしある時、大堀川は大雨によって氾濫しそうになってしまった。私にとつての癒しで、温かいと思っていた大堀川の水位が急に上がり、大量の水が速く流れていく様子は、ただただ怖かった。実際、その時の大雨で私の祖母が住んでる付近の一宮川は氾濫してしまった。今まではテレビの中のニュースで聞くだけで、身近に感じていなかっただけに、水の危険は意外にも身の近くに潜んでいるものだと、そう感じた。結局大堀川は氾濫せずに済んだのだが、そのことをきっかけに私は川の氾濫に対する地域の取り組みや意識について調べたくなった。私は、川は自然のまま人間の手なんて加えられていないままだと思っていたのだが、氾濫しそうな際に水を溜め込める堤防や、川幅を広げることで水位を下げる引堤など、数百年前からの治水のための知識と技術を込めて、川は計画され整備されて来たものだということを知った。

触れない日はないとも言える身近で温かい水という存在。それに加えて危険だということもしつかり頭に入れていこうと思った。

それからというものの水について私は興味を持ち始めた。あの河川敷を歩いている際通りかかる人々がどれだけ水と関わっているのか。ランニングしている人が飲むスポーツ飲料などの水。公園で子供達が掛け合っている水。私たち日本人の周りには、たくさん水が溢れていることを知った。しかしこんな私の周りの世界とは裏腹に水が不足している国があることも知っておかなくてはならない。

これは二〇二一年の統計だが、人間が使用可能な水の量、水資源量について私たち日本国の水資源は、四三〇km³で、世界のランキングでいうと二七位。比較的高いランキングだ。しかし、ナウルという太平洋西部に位置する国は水資源量わずか〇・〇一km³でランキングワースト一位だ。国は国でもとても大きな差があることを知った。私はこの事実を知って心が酷く痛んだ。手を伸ばして少し蛇口をひねれば私たちの手元に出てくる水は、ある国の人たちにとっては宝石みたいに大切なもので。ちっぽけな私なりに世界の水不足ボランティアに取り組んでみたり、自分の使う分の水を抑えてみたりと、自分にできることを一歩ずつやらなくてはならないと思った。急激に世界は変動するものではなく、この一歩を歩む人達が増えるからこそ世界は少しずつ変わっていくものだと思うから。私もその一員になれるように。努力しようと思う。

最後に私は気づいたことがあった。あの日母が私を連れ出して大堀川に行った理由だ。それはきっと母がああ川の流れの美しさを知っていたからなのだろう。水が人の心まで温かくすることを。水と生きる人間の美しさを。